私の家族は自決を中止した

佐藤孝則(さとう・たかのり)さん

1930(昭和5)年12月8日生まれ
民間人　3 歳の時家族でテニアンに移住
戦地　テニアン

　テニアン島、広島・長崎に原爆を投下したB29の、出撃基地になった。激しい艦砲射撃。米軍は、昭和19年7月24日上陸。日本軍・民間人、島の南端カロリナス台地に、追い詰められ玉砕。私は、13才でした。
　日本軍は、最期の突撃に集結していた。銃を空に向け撃っている兵士、若い兵士が、家族の写真、預金通帳、現金など、届けてほしいと、頼まれたが、自決する身と、親父は断わった。お母―さんと、声を上げ自決する負傷兵。米兵の、顔を見てからでも遅くないと、自決は中止。親父は、家族に生き延びることを話す。家族8人、一人でも生きて日本へ帰れるだろう。
　台地から危険な崖を海岸へ降りる。おおぜい人がいました。海に身を投げる人も。5キロ先の、サイパン島南端の砲台で、ドドドドドと音がして、間もなく着弾、岩陰に身を寄せた。破片が音をたててとび交う。脇にいた友達は、首に破片が入り、ウーと即死。私は左足内側の太腿を、破片にえぐられ、母が、手拭いで縛ってくれた。親父は腰に落石、母は足に、軽傷で良かった。直撃をうけた人達もいる。
　数日スコールがなく、喉の渇きも烈しく、水がほしいと子供は泣き叫ぶ。水を求めて移動中に、家族にはぐれ一人になった。数日ぶりのスコールは、木の幹を流れる雨水を手で押さえて飲んだ。水の有難さが身にしみた。夜明けまで寝込んでしまった。
日本軍の迎へを信じて生きる敗残兵と、行動を。坊や、兵隊さんと呼び合う。洞窟にいる日本兵に、出てくるよう呼びかけがあり、米軍は、掃討戦が始まる。洞窟から洞窟へ逃げ込んだが、出口が塞がり、小さい穴から助けを求めた。2日掛かりで助けてくれた。命の恩人は設営隊員と聞く。その後錯乱して、撃たれた。
　東海岸は食べものがなく、台地を越えて、テニアン港側に移動中。20メートル位先に、人の気配、月の明かりで鉄兜二つ、米兵とわかり逃げる。弾が耳をかすめてゆく。相棒は腰に、私は右太股に弾が。3回目で非常線を突破し、我が家のあった近くに、さとうきび畑の中で、日が暮れるのを待つ。洞窟と違い太陽の有難さを感じた。危険な日々の始まりでした。
　テニアン港、マルポの採石場、昼間のようだった。ダンプカーが、切れ目なく一条の明かりのように、北端まで続いていた。
　B29の滑走路建設のためだった。

バシー海峡の悲劇

瀬戸山定(せとやま・さだむ)さん

1926(大正15)年4月15日
陸軍　1942(昭和17)年、陸軍少年飛行兵に志願(14期生)
所属　陸軍航空通信学校、陸軍航空総軍司令部通信班
任地　茨城県、東京都市ヶ谷、大阪府八尾市など

昭和19年7月にサイパン島守備隊や住民が玉砕して、島は米軍の支配することになりました。国内の衝撃も大きく、軍の学校も臨戦態勢に移行しました。これらにより航空通信学校も昭和20年4月卒業予定が19年7月20日に繰上げ卒業となりました。

休暇を与えられ「ご家族にそれとなくお別れをして来い、それとなくだぞ」と念を押されて久々に家族と歓談、そっと遺書を置いて帰校、ただちに格納庫の中で任地発表が行われました。南方にでも行けるかなと思いきや、考えてもいなかった「貴様は学校に残って後輩16期生の助教に当たれ」との命令、腐りましたね、助教とは、同期生1500人の最後尾を走っている感じで劣等感さえ感じました。厳しい報道管制で何の報道もありませんでしたが、戦後次のような悲劇が判明しました。

少年飛行兵第14期生の通信・整備担当者合計75名は呉軍港に集結し、他部隊の兵士や弾薬、食料、兵器、等を満載した船団に組み込まれ、同期生は白鹿丸に乗船してマニラを目指しました。

米潜水艦の魚雷を警戒しながら中国大陸に沿って南下、10月18日にバシー海峡に入りました。バシー海峡は西太平洋とインド洋を繋ぐ水路の要衝、米海軍も多数の潜水艦を配置して日本船舶の侵入に目を光らせていました。

嵐の前で海は荒れていましたが、船団は魔のバシー海峡に突入しました。その行動は米潜水艦の知るところとなり、白鹿丸もその魚雷を受けて撃沈されました。荒海に投げ出された兵士たちの最後は哀れなもの、救助船もなく、力尽きて次々と波間に姿を消し、海の藻屑と消えました。

任地を目前にして無念の涙をのんだ同期生73人の無念を思うと、胸が張り裂ける思いが致します。せめて任地に到着して通信所を開設し、アンテナに電波を乗せて交信させてやりたかったの思いでいっぱいでございます。

思い出せば、喧嘩して血だらけになった友、感極まって抱きついた友、飯を分けてくれた友、風呂で背を流してくれた友、等など、走馬灯のように鮮明に頭に浮かんで参ります。

今は亡き戦友を忍んで瞼を閉じればあの顔がその顔が、耳奥にはあの声がその声が鮮明に残っております。

最後に一言　　センユウヨ　ヤスラカニネムレ

東京大空襲、私は被害者であり加害者だった

亀谷敏子（かめや・としこ）さん

1931（昭和6）年11月5日生まれ
民間人　国民学校高等科
居住地　東京都深川区（現江東区）白河町

昭和19年3月、16歳になる兄は予科練に志願したいと両親に頭を下げました。反対した父と母を私は心の中で非国民だと罵りました。外出を禁じられた兄に頼まれ、文具屋で応募用紙を買いました。兄は予科練へ、私は国民学校高等科に進学しました。

3月10日の真夜中、空襲警報のサイレンが鳴りました。白河町の避難場所は三つ目通り沿いの末廣味噌の地下室で当時珍しい鉄筋ビルです。低血圧の私は起き上がれず母達は先に避難。帰ってきた父に「表は火の海だ！」と叩き起こされました。味噌屋はぎゅうぎゅう詰めでなんとか1階に入れてもらいました。少しして火が入ってきたらしく凄い悲鳴がして、父は「皆外に出ろ！」と強引に戸を開けました。私は外に出た途端風で吹き飛ばされ、火の付いた木片やトタン板が小名木川の向うからぼんぼんぼんぼん飛んできます。三つ目通りの真ん中まで何とか這って行くと父がトタン板を被せてくれて、私のもんぺに付いた火を一生懸命手で消してくれました。父は「こっち来い」と私を引っ張って、コンクリート塀の向こう側に私の体を放り投げ、父も隣に来て塀を背にトタン板を被りました。至る所に火が付き真夜中なのに周囲は明るくて、B29の搭乗員が笑ったのが見えました。

朝、町は静かでした。煙でやられた目が開けられず、父に手を引かれて何かに躓く。痛む目を開くとピンク色に爛れた死体や瀕死の人。味噌屋は骨組みだけになって、中で人が燃えています。私は何も思考が働きません。父は避難所を回って母達を探していました。3月14日、味噌屋の地下の遺体が引き上げられました。憲兵が10分間だけ猶予を与えると言うので、私達は焦る気持ちで順々に遺体を見ます。着物で母だとわかりました。1歳の弟は首も足首もなく、5歳の妹は腰から上だけ。10歳の妹は腰から下だけ、もんぺで分かった。すぐ下の12歳の妹と15歳の姉は見つけられませんでした。骨を少しずつ削り取って簡単な葬儀を済ませました。

戦争が終わり、内地の兵隊の帰還期限の8月末になっても兄が帰って来ません。土浦海軍航空隊を訪ねた父は、兄が6月10日の空襲で戦死していたと知りました。17歳2カ月でした。「自殺しようと思ったけれど、お前が一人で待っていると思った」と言って、父ははじめて泣きました。

2月に母達は茨城へ疎開するはずでしたが、3月末に兄が特別休暇で帰宅すると連絡があり、家族水入らずで兄を迎えようと疎開を延ばしたのです。もし兄が予科練にいかなければ母達は無事でした。家族6人を殺したのは私です。一人の人間を被害者だけでなく加害者にもしてしまうのが戦争です。

骨と皮だけの姿になった

武田昭(たけだ・あきら)さん

1934(昭和9)年5月15日
民間人
居住地　東京・浅草区(現台東区)、荏原区(現品川区)

昭和18年、私は9歳で父を亡くして品川区の霊源寺に預けられました。西五反田の第四日野国民学校に籍がありましたが、学校に行かず小坊主をしており、学童疎開はしませんでした。和尚の家が浅草の吾妻橋近くにあり、そこで寝起きをしていました。

昭和20年の3月10日未明、「両国が燃えている！上野に逃げろ！」という声がして外に出ると、夜空に火の粉がバラバラと舞っています。吾妻橋から人がどんどんやって来ては、熱さで橋から先に進めず隅田川に飛び込んでいきます。私は和尚一家とはぐれてしまい、近くをうろうろしていました。おぶい半纏に赤子をおぶって子供の手を引くお母さん。その半纏に火の粉が付くのを見ました。逃げる場所もなく、私は吾妻橋近くのシャッターが閉じられた地下鉄の入口にうずくまりました。蒸し風呂のように空気が熱くて熱くて、火の粉を乗せた熱風が吹き付けます。空が白むまでそこにいました。

夜が明けて、火に焼かれた熱い道を歩くと、近くで先ほどの親子が焼け死んでいました。隅田川の堤防の角には遺体が山盛りです。何も感じませんでした。両国の方から小舟が来て遺体をツルハシで引き揚げていました。浅草の観音様の辺りも皆焼けて、田原町をずっと西に歩いて上野駅に出ました。そこから省線(現在の JR)に乗って目黒へ行き、目蒲線の不動前駅まで来て霊源寺に着きました。その後、和尚が亡くなり一家も富山に疎開することになり、「お前はここで父親の菩提を弔え」と言われて、10歳の私は寺に一人残されました。

寺には食べ物は何もありませんでした。当時の事はあまり覚えていませんが、本堂で横になって、水と、自分の血を吸ったシラミを食べて生き長らえました。肉はそげ、尻が凹み、骨と皮だけの姿でした。

5月24日の深夜にも空襲がありました。誰かが「火事だぞー！」と叫んで、大人達が不動前の方へ逃げていく。榊のような葉をした生垣が燃えてばりばりと凄い音があちこちからする中を私は一人で広場まで歩いて行きました。建物疎開で空き地になった場所に皆集まって朝を迎える頃には、周りは全て焼けて、霊源寺だけが残っていました。

終戦の日、本堂に大人達がラジオを持って来て玉音放送を聞きました。私は理解できませんでしたが「これから日本をよくしろよ、昭頼むよ」と言われ返事した事を覚えています。

寺に和尚一家が戻ってきて、私は叔父に引き渡されましたが面倒を見る余裕がない事は明らかでした。上野駅で過ごしていた私は碑文谷警察署に連れていかれ、戦災孤児が集まる萩山戦災孤児院に入り、18歳までそこで生活をしました。

学徒動員で「桜花」を製作した

川口ナオ（かわぐち・なお）さん

1929（昭和4）年6月5日生まれ
民間人
所属　茨城県立土浦高等女学校
居住地　茨城県土浦市

小学校6年生の12月、太平洋戦争が始まりました。翌春、女学校の入学試験の口頭試問で将来何になりますかと聞かれて、真珠湾攻撃で亡くなった「九軍神の母になります」と、母になることがどういうことか全然分からなかったけれど答えました。先生に「偉い！」と褒められて、息子が死んだら悲しいだろうなどいうことより、お国のために亡くなったんだから本当の誉れだ、偉いと、そういう気持ちしかありませんでした。学校に行くとき、名誉の戦死者の札のある家の前を通ると、深くお辞儀をする。丸々軍国主義そのものでした。

進学した茨城県立土浦高等女学校は、霞ヶ浦海軍航空隊が近くにあり、地元の子どもより、海軍さんの子どもがどんどん転校してきました。呉から、佐世保から、青森の大湊からも来ました。軍人の家庭や兵隊さんも多く、町は物資や食料を軍に納めていたので、とても栄えていました。

昭和19年、3年生の途中、学徒動員で同級生250名全員が第一海軍航空廠に行きました。家が遠い人は、航空廠の寮に寝泊まりもしました。

私はそこで飛行機の中部胴体の部品を作りました。万力を付けてやすりをかけたり、鋲打ちをしたり。何を作っているかは知らされませんでした。15歳の女の子がやる慣れない仕事で、工員さんに怒られ怒られ働きました。若い工員さんには召集が来て、おじさんの徴用工と私たち、県立中学の中学生も来ていました。

20年2月、本工場が爆撃されたました。高射砲で下から狙ってもとても命中はしません。山の中の雑木林の木を切って、掘っ立て小屋のような疎開工場がたくさん出来、分かれて作業を続けました。疎開工場も攻撃され、防空壕があっちこっちに掘ってあって、そこに飛び込みます。

疎開工場に移動した時に、技術中尉から作っているのは「桜花」だと初めて説明されました。桜花は人は一人しか乗れないのです。一式陸攻の下に抱えて行き、敵艦の近くで離され、爆弾を積んだまま操縦して敵艦へ突っ込む特攻機だと聞いた時、再び帰る事のない飛行機を操縦していく人の気持ちを思うと胸がいっぱいになりました。でも私たちはただ勝つことだけを信じて特攻機を作っていたのです。

御聖断が下った時、まさか負けるなんて夢にも思わなかった。皆で抱き合って一生分ぐらいの涙を流しました。奴隷になってアメリカに連れていかれるんだ。これでサヨナラね。

翌日からまた工場に残務整理に行きました。大きく穴を掘って、重要書類を全部燃して、飛行機の部品はそこに埋めて土を被せました。

ジャングルでの戦場体験

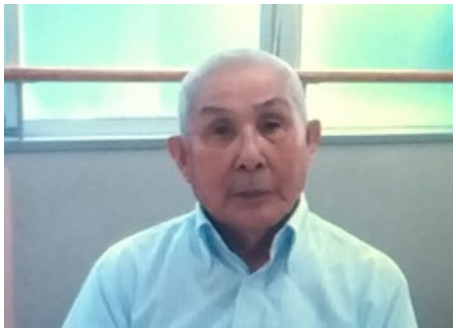
坂上多計二(さかうえ・たけじ)さん

1925(大正14)年6月26日、台湾に生まれる
1943(昭和18)年、海軍第103軍需部の軍属(農業指導員)
1944(昭和19)年、陸軍に現地入隊
所属　第100師団独立歩兵第165大隊(実質、海軍第103軍需部ダバオ支部に派遣)
戦地　フィリピン・ミンダナオ島

　私は比島ミンダナオ島ダバオ市ラパンダイの海軍直営農場で軍属指導員として、台湾人と在留日本人120名の作業員を指揮し、生鮮食品を生産して、現地の陸海軍へ補給する仕事をしていました。1944年4月に若い指導員は現地で徴兵検査があり全員合格し、陸軍独立歩兵第165大隊へ現地入隊した。しかし一週間後にダバオ海軍司令部の命により、元の農場へ陸軍兵籍のまま派遣されて営農指導を続けることになり、この大隊を離れました。
　翌年五月に米軍がダバオ周辺に上陸し、連日砲爆撃が激しくなり、農場員も死傷者が続出し、営農が困難になったため、私は部下の農場員20余名を引率し、後方のジャングル地帯へ逃げ込み、山地原住民の生活跡地を見つけて小屋を設営して自活体制を整えました。 持ち込んだ食料はすぐ乏しくなり、先住民が植えたサツマ芋や煮れば可食可能な雑草も少なくなった。毎日、ジャングルを探し回り、野良犬のような徘徊生活を続け、日ごとに死亡者が増えていった。
　ジャングルを徘徊すれば、大木の根元に寄りかかり、遠目には微笑んでいるような日本兵を見かけた。近寄ってみるともう死亡していて、ハエが目元口元に産み付けた卵がウジ虫になり、うごめいているのが、薄目を開けて、白い歯を見せているようだった。プーンと死臭が漂い、本当に地獄絵図のようだった。毎日の食料探しにチャプチャプと音のする飯ごうを身に付けた落伍日本兵を見ると怖くて、ジャングルを単独行動ができなかった。
　ある夕方、弱った日本兵が「俺を泊めてくれ」と訪れたが、こちらも極限状態で余裕もなく拒絶し追い払ったら悲しそうな顔をして立ち去った。翌日食料を探しに出たら、すぐ近くで亡くなっており、家族写真がそこら中に散らばっていて、裏面に「妹尾」と言う名前が書かれてあり、望郷の念を抱きながら亡くなったのかと一時胸が痛んだのだった。
　我が隊員も栄養失調で日ごとに痩せ細り、塩分が尽きると体全体がパンパンになり水膨れのようになって、やがてジャングルの露となってゆくのです。米軍のまいたビラを拾い、鈴木貫太郎総理がポツダム宣言を受諾し敗戦を知ったが、信じる気になれなかった。9月30日、弱った隊員を支えながら、米軍に投降したとき、残った隊員は僅かだった。
　今政府が周辺国の脅威を強調して、平和憲法を改憲して「緊急事態の条項」取り込もうとしています。「緊急事態の条項」とは総理大臣にフリーハンドを与える危険性を敏感に感じます。太平洋戦争を経験した我々の勘の知らしめるものです。私は、老骨に鞭打ち、生きている限り、平和憲法擁護の声を大にしたいと思います。

飛行機にかけた青春

上野辰熊(うえの・たつくま)さん



1928(昭和3)年3月 13 日生まれ
陸軍　1943(昭和18)年、陸軍少年飛行兵に志願(15期生)
所属　大刀洗陸軍飛行学校京城教育隊、飛行第66戦隊など
任地　京城、万世飛行場(鹿児島県)、大刀洗(福岡県)など

小学校6年時、内モンゴルの鉄道事故で父を失い北京に移りました。18年3月あこがれの飛行兵を受験し操縦に合格。大刀洗陸軍飛行学校甘木生徒隊に入り、6か月の訓練後私達 96 名は京城教育隊に入りました。

操縦班は一機に助教と生徒 5～6 名で編成され、通称赤トンボ機の教育が始まりました。助教と生徒が同乗して操縦装置に手足を添えて体感で覚えながら、単独飛行が許されて初めて一人で飛ぶのですが、この時の爽快感、感動は一生忘れられない思い出です。

その後横転反転宙返り等の高等飛行、編隊飛行を習い卒業となりました。一機失速墜落殉職者が出てこの時空中勤務者は何時命を落すか知れないと覚悟しました。 その後朝鮮 101 部隊の 99 式襲撃機で戦闘機並みの高等飛行を教わり 20m以下の超低空、鉄橋潜り、航法等を習得し「陸軍飛行機操縦徽章」を授与されました。私達は錬成飛行に入り昭和20年正月に部隊は艦船攻撃実習と空中射撃実習で海岸の海洲飛行場へ、実習内容から特攻に行くことは解りました。99 襲撃機の限界速度 500 キロの操作では命を懸けた戦いでありました。

錬成も終わり次はどこの部隊にと考える間もなく、一人一人が中隊長室に呼ばれ「本隊でも特別攻撃隊の編成が始まることになったので、諾否について聞く」と言われ、私は即座に「熱望」と申しましたが、先の比島のレイテ陸軍特攻を知る者は否をいう者は居たでしょうか？

3月私達は爆装された特攻機を受領に各務原飛行場へ陸路出発、この頃本隊で次々特攻の編成式が行われ 72 隊がたまたま爆装で来ていました。万世飛行場で犬と写っていた5名です。試験飛行で犬山城を一周して天守の観光客と手を振り合って挨拶したが隊長に見つかり大目玉。12 機で平壌帰還中私は鈴鹿麓で乱気流を受け、墜落寸前母と姉の顔が浮かび、間一髪上昇しました。

助教任命後に66戦隊へ転属命令、三角兵舎の同期の通信・射手に出撃命令が出て皆 10 代、同じ部屋で送り出す。戦隊の別れは淡々としている、盃を交わし翌朝出撃したが全員未帰還でした。64 振武隊が出撃したのち沖縄戦が終了しました。

7月大刀洗北飛行場に転進、数日おきに米軍機が機関砲を打ち飛び去って行き、農家の女の子が驚いて泣いていました。非常呼集があり8月13日不寝番に起こされ上野、3中隊に出撃命令が出て呼んでいるのですぐ行けと言われ、私物遺品等を風呂敷に包み、中隊事務所に預け、落下傘袋のみを下げて3中隊に出頭待機していました。14日に3中隊と特攻隊2隊に出撃命令が出たが、15 日の朝待機命令に変わり、正午特攻隊も含め全員戦隊本部に集合。無条件降伏を知りました。

学徒出陣の記

内海琢己(うつみ・たくみ)さん

1925(大正14)年７月４日生まれ
陸軍　広島師範学校在学中の1945年4月現役兵で入隊
所属　熊本陸軍予備士官学校(陸軍特別甲種幹部候補生)など
任地　広島県、熊本県、岡山県

故郷は、瀬戸内海、尾道の北部、木ノ庄村。広島師範学校2年の時、召集を受け、19歳で昭和20年4月1日に、原爆ドームの北にあった西部第二部隊に、初年兵として入隊。

5月初め、熊本予備士官学校への転属命令を受領。熊本市北部の菊池郡黒石原村にあった通信訓練校に「特別甲種幹部候補生」(略称特甲幹)として入校。翌日から、一日に24時間電波漬けの、歩兵無線通信の猛訓練が始まる。

6月中旬、おかげで発電器操作、アンテナ設置、無線送受信機の操作の基本がおぼろげに分り始める。黒石神社境内での訓練で、内海候補生は指名されて、神社から、学校本部への送信を実施する。全員注目の中、手帳を見ながら、機具点検→予備操作→送信実施→機具収納。区隊長が、耳から受信器をゆっくりはずして、「内海候補生の送信成功。」の声。全員拍手。

夕食後、候補生全員が集合し、棚橋隊長の訓話を聞く。「今、戦況は、非常に重大な、情況にある。もしも、日本が異常な立場になった場合(具体的な表現はされなかった)、思慮ある行動を取ってもらいたい。」と謎めいた講話を聞いた。

この講話の2、3日後、通信隊の全候補生約80名は、無線通信技術の完成直前に、隊長の講話を餞(はなむけ)として胸に納めて、熊本城兵舎に移った。九州地区にあった「特甲幹」は、それぞれの兵科教習の完了直前にこの兵舎に。その数約600人か。

この「特甲幹」達は翌日から、阿蘇山麓で、特殊訓練を始めた。すでに沖縄を米軍が占拠しており、やがて南九州に上陸して来るであろう陸上戦車隊に対する撃滅作戦である。海岸に掘ったタコ壺型の穴に、爆弾を抱えて隠れ、上陸戦車の底部めがけて、突撃するという単純明快な作戦である。草を付けた網を被ってタコ壺に入り、合図に応じて竹で作った戦車の形のものめがけて走る。原始的極まる訓練だったが、実戦をやることになるんだという気持ちだけは、現実のものとしてひしひしと迫ってきた。

2日目には、訓練中に米軍グラマン機の攻撃を受けた。以後は兵舎の一隅に集まって、ただ出撃の命令を待つ日々。1週間後なのか、明日なのか。どれだけ時間があるか分からない。その気持ちの高まりにみんながじっと耐えていた。その中で一人の候補生が舌を噛み自殺を図った。

8月4日、熊本兵舎の特甲幹は、岡山県中部の津山へ移動。途中、広島駅で2時間ばかり休憩。

8月18日、山上で、区隊長から「終戦」の報告を聞く。圧迫されていた気圧が急に軽くなった様に感じた。9月1日の夕刻、兄弟4人全員出征の内海家に、一番目に帰宅した。

「核」も「戦争」もない未来を願って

小谷孝子(こたに・たかこ)さん

1939(昭和14)年1月４日生まれ
民間人
居住地　広島県広島市

5才の時、海軍だった父が病死し、祖母の住んでいた広島市に引越す。祖母・母・姉(10才)・兄(8才)・私(6才)・弟(3才)六人家族。母が頑張ってくれましたが、食べ物にも困り、親戚に疎開することになった。

その日は8月6日のお昼。午前中、裏の川に遊びに行くことにした。私は水を呑みに家に帰った時、原子爆弾が落され全員被爆。祖母、姉、兄、弟は全身火傷。4日目の朝意識がもどった弟は、母から一口水をもらい「お水おいしいね」と言って息を引きとった。私は家の下敷になり、かすり傷で助かり、目の前で沢山の人が死んで行くのを見て、心に忘れられない傷を負った。

母は家族のために、食糧、薬を求めて焼跡をかけまわる毎日。それでも時間を作り、原爆で孤児になった子供のお世話に、瀬戸内海の似島(にのしま)の施設に通った。寝たきりの家族の世話をするのは、6才の私の役目。「よその子の世話をせんと、もっと私の世話をして」と泣きながら母に頼んだ。「我がままを言わんのよ、夜にはお母ちゃん帰って来るでしょ。あの子達は、なんぼう待っても親は二度と帰ってこんのよ。どんな大変な時でも、自分の事だけでなく、人の事も大切に出来る心の豊かな人になるのよ」と母は教えてくれました。その母は、6年後、原爆症による白血病で亡くなった。

祖母と姉は、全身火傷のあとがケロイドになり、肺がん、肝臓がんを患うも生きてくれた。兄は頭、顔に刺さったガラスを取りのぞく手術を何度も受けたが元気で生きてくれた。

一人ぼっちになった子は、命は助かったが、一人で生きて行かなくてはならない人生を戦争は、子供達におわせてしまいました。(戦後の生き方)どんなに生活が苦しくても、飛行機に脅えることのない生活に、笑顔いっぱいで生きていました。私も母の様に優しい幼稚園の先生になる夢を持ち働きながら勉強し先生になった。30代の時心を閉した5才児を受け持ち心を開かせてあげたいと腹話術を習いました。

22年前、師匠から「原爆を風化させない為に、人形を3才で亡くなった弟と思い二人で語りなさい」とご指導下さいました。原爆により身心に傷を負った友人から、「貴女は火傷も病気もしてなくて、被爆者とは言えない」と言われ元気な事に罪悪感を持っていた。姉に相談した。「あなたの目の前で多くの人が無念の死を遂げたのを見たでしょ。その人達から頂いた命なのよ。平和を語って行くのが貴女の使命よ」と背中を押してくれ、語り継ぐ決心をした。

若い人に平和を一緒に考えて欲しいと願い、10年前8名の被爆者と世界23か国を廻りました。小さな平和の種が芽吹くことを願い、命ある限り体験を語ります。

自決しなかった我が開拓団

柴崎勝（しばさき・まさる）さん

1938（昭和13）年12月5日
民間人
所属　山形県第7次満州開拓団
戦地　満州国浜江省（ひんこうしょう）

私の家族は、山形県第7次満州開拓団として昭和14年、母と生後間もない私を連れて満州へ渡りました。

満州國浜江省に到着すると、何もない荒野で一からのスタートでした。開拓のための指導を受けその土地に合った作物や米作りを学び、二人の妹にも恵まれました。ようやく一段落した頃、父のもとに赤紙が届きました。国のために出発する父を見送り毎日が不安の日々でした。二度目の父からの手紙には「激戦地に行く。子供を頼む。内地へ帰れ」という文と一緒に爪と髪が入っていました。

それから暫くして、団長より終戦の知らせを受けました。その後、開拓団の人達と合流し、転々と場所を変え、内地を目指す難民となりました。略奪や強姦に襲われる恐怖の中、女性は男装し、顔には泥を塗り頭は丸刈りでした。母は背中に長女、腕に次女を抱き、私の手を引いて逃げました。空腹で歩くのもやっとの私は「死にたいのか」と母親の激を受け、引きずられながら歩いている時、ロシア夫人がこそっと腸詰めをくれました。敵国なのに、と複雑な思いでした。母は空腹で弱っている妹達はもう生き伸びられないかも知れないと思ったのか、妹達には見えないようそっと私に腸詰めをちぎってくれました。ひと口食べると体に力が沸いてきた事は今でも記憶に残っています。

次の地は川を渡ってすぐのハルピン扶桑高等女学校の2階で、50人程が身を置くことになりました。そこにはロシア兵が自動小銃を持って巡回し、見張られながらの生活でした。食事は残り物のジャガイモの皮を丸めて食べるような日々です。体力の弱った妹達は当時流行したジフテリアにかかり亡くなってしまいました。悲しみも束の間「明日の10時まで日本人皆殺し」と突然言われました。殺される位なら自決だという団長の判断で、自決の仕方を教えられ恐怖で震える中、最後まで諦めるなという多数の婦人側の声で、逃げる決断をしました。

ハルピンから日本行きの港へ向かい、佐世保に到着しました。そこからロープで囲われただけの列車の荷台に乗り、広島駅で停車した時、一面焼け野原。「ピカドンという爆弾で焼けた」と教えてくれる人がいました。その時の光景はとても言葉にはできません。

今となり満州での出来事で思いますのは、敵国人ながら腸詰をくれたロシア夫人、ラジオや安全な避難先を教えてくれた現地人のやさしさです。人は悪くはない、悪いのは全て戦争だという事です。

仲間も一緒に帰りたかった

中島千代吉(なかじま・ちよきち)さん

1929(昭和4)年1月30日生まれ
満蒙開拓青少年義勇軍(第6次)
1943(昭和18)年志願、1944(昭和19)年3月満州に
戦地　満州・勃利、東京城、ハルピン

　1945年(昭和20年)8月9日、ソ連軍の侵攻で、義勇隊勃利(ぼつり)訓練所13個中隊千余名は街の防衛のため軍と合流。上空に敵戦闘機、地上戦はありませんでした。ソ連兵や部落民の目を避け南下、 途中敵戦闘機の掃射で死者を出し、山中逃避行動に移りました。食べる物も無く、草や木の葉を喰べ、過酷な行動は多くの脱落者を出しました。

　9月10日ソ連軍に降伏、銃口に脅かされ東京城(とんきんきょう)に連行され、18才以上は軍人と見做すと幹部と年長者が捕虜収容所に送られ、他は軍施設跡に収容されました。食事は一日飯盒蓋一杯の高粱、厳しい寒さに夏服ボロ靴、布団代りの南京袋。ソ連兵の連日の掠奪迫害行為、恐怖の生活でした。

　10月13日、朝鮮公安兵が偽のソ連軍の証明書を手に、君達を図們(ともん)経由で日本に帰すと云われ、線路伝いに歩いて行きました。歩けない病人の介添えで大阪・中村、山形・中島が残りました。僕も帰りたいと言いましたが誰も何も言いません。しかし病人を置いていくことは出来ませんでした。当然の様に食糧の供給は断れました。町の開業医村田医院から食べ物や薬を貰い飢を凌ぎましたが、声も無く亡くなる仲間20人になっていました。

　学徒挺身隊の子息を探して中学の出野先生が来ました。君達、哈爾浜(ハルビン)に行こうと誘いました。重病者は村田医院に託し、有蓋貨物車に乗り込みました。11月も半ば、日本人居留民会が運営する花園収容所に入所しました。食事はここも乏しいものでした。

　11月20日、戦利品をソ連本国に送る貨車積みの使役に、自分が狩り出されました。中村は病気で私一人でした。パン1個で早朝から深夜まで酷使されました。12月20日解放され、収容所に戻り目にしたのは山積みされた遺体でした。40人の仲間の姿はありませんでした。

　近寄ってきた中国人の誘いを受け、只一人生存していた中村に別れを告げ馬車に乗りました。床屋さんでした。家族と同じ生活、寄留半年、昭和21年夏、主人が小輩日本に帰えれると千円くれ、早く行けよと急かされ、礼を言う間もなく別れました。

　1946年(昭和21年)10月19日生家に帰還。一足先に生還していた同郷隊員が、一人の死と、千代吉は病人と残ったから生きては帰れないと伝えていました。国民皆兵、四男の兄は朝鮮木浦(もっぽ)から生還。三男の兄は昭和18年の秋豪州で戦死。次男の兄は20年の8月13日、満州ハイラルで戦死。幼な子と残された義姉は19才でした。(帰国後すぐ病死した)母の死を悲しむなか、東京城で村田医院に託した同中隊員矢作秀昭の生家、新庄町沼田を訪ねました。気の重い足取りの一日でした。

　昭和22年春、哈爾浜から生還した中村の便りは大きな喜びでした。

死んでたまるかと頑張った
西倉勝(にしくら・まさる)さん

1925(大正14)年5月 10 日生まれ
陸軍　昭和 20 年現役兵として入隊
所属　歩兵第75連隊、第79師団歩兵第290連隊
戦地　朝鮮半島・会寧(かいねい)、コムソモリスク

　1945年19歳。東京立川の日立航空機に働いていた私に赤紙の知らせが届き、実家のある新潟県柏崎市に直ぐに戻りました。
　1月15日新発田第16連隊に入隊。2週間足らずで朝鮮の会寧の部隊に、6月関東軍に編入しソ連の国境にて陣地構築に従事しました。厳しい実践訓練、海抜200mの山地に草ぶきの兵舎を作り、「自分達の死に場所だぞ！」と蛸壺堀りの命令が下るも未完のままに敗戦。 一度も戦闘を経験せずに終戦を迎えました。 「日本は負けない」と信じていた為、呆然とし手榴弾で自決も考えました。
　武装解除地の図門付近は、死体が散乱し、戦車の残骸、日本の5倍以上もの戦車を見て圧倒的な武力格差に驚かされました。 その後ソ連の監視下の元、武装解除、自決用の手榴弾も差し出しました。
　ソ連兵に「ウラジオストクから日本に帰す」と言われ200キロ行軍、1週間以上野宿で歩かされました。ソ連領地から貨車に乗せられ、北の方向へ走っている事が分った時はなすすべが有りませんでした。
　10月初めにハバロスク地方のコムソモリスクの捕虜収容所に到着。「寒さと飢えと重労働」の捕虜生活は約3年間続きました。
　収容所の1日は、午前6時起床、朝食。7時半に出発。作業現場まで徒歩30分。8時に作業開始、昼 1 時間休憩、午後5時終了、ラーゲリへ。作業は貨車の積み下ろし、道路工事、資材運搬、住宅建設など。「働かざる者食うべからず！」食事はノルマ達成率で1級から3級食まで。食事の分配には目の色が変わり、人間の本性を見ました。月1回の身体検査ではソ連の女医がお尻を抓って皮膚の戻り具合で1級から4級までに分けられました。1級が重労働で4級は室内作業。中でも床屋が暖かい部屋で作業をしているのを見て、私も手に職が有ればと思ったものです。
　合言葉は「死んでたまるか。白樺の肥やしになるまいぞ！」と励まし合いましたが、寒さと栄養失調でどんどん死んでいきました。私自身抑留2年目に胸膜炎で入院しましたが、奇跡的に生還。あいつは死んだと噂になっていました。
　一番の想い出は民家へ使役に行った際奥さんが作ってくれたじゃがいも(馬鈴薯)のバター炒めが美味しくその味が今でも忘れられないです。
　ある日、収容所の広場に呼び出され列車でナホトカへ集結。「恵山丸」に乗船して1948年7月28日舞鶴に上陸、優しく「ご苦労様」と迎えてくれた白衣の看護婦さん、DDTの消毒を受け風呂に入り、日本食をいただき、柏崎の駅で父と再会しました。

ソ連抑留は幸運

呉正男(ご・まさお)さん

19271(昭和2)年 8 月4日、台湾生まれ
陸軍　1944(昭和19)年、陸軍特別幹部候補生に志願
　　(1期生)
所属　滑空飛行第一戦隊
戦地　朝鮮半島北部。戦後中央アジア・カザフスタンに抑留、1947(昭和 22)年復員

私は昭和 19 年 4 月志願入隊の陸軍特別幹部候補生です。

私は空襲を受けたことや発砲をしたことがありません。敗戦前年の 19 年に入隊した海軍の予科練、陸軍の少年飛行兵・特別幹部候補生は戦争遂行上の戦力となるための技術の習得はできなかったと推測しています。現に、私が入隊した水戸航空通信学校の機上通信士中隊 200 名の中での戦死者は僅か 12 名でした。終戦の 1 年前から既に、通信士搭乗の大型機の出撃も減少となっていたからです。

私が機上通信士として配属された西筑波飛行場の滑空飛行第一戦隊は、九七式重爆撃機で大型滑空機を牽引し、これを敵地上空で切り離し、操縦士 2 名と空挺隊員 20 名を送り込む部隊でした。出撃直前に配属されましたが、大型滑空機に搭乗する先発の空挺隊員の輸送船の沈没と、制空権の喪失で出撃する機会はなく、幻のグライダー部隊となり私は戦死を免れることになりました。

昭和 20 年 5 月に移動した朝鮮の宣徳(ソンドク)飛行場では、志望・熱望・熱烈望のいずれかを選ぶ特攻意識調査がありました。出撃先は米軍占領下の沖縄の飛行場と予想されるものでしたが、私は出撃と戦死を予期していたので順番が回って来たと思い、熱烈望に丸印を付けました。選ばれることはありませんでしたが、沖縄への特攻部隊は「神龍特別攻撃隊桜空挺隊」と命名され 8 月 5 日に発進し、福生飛行場で終戦を迎えています。

私は宣徳に残り、8 月 15 日の玉音放送は雑音と難解な文面のため、ソ連軍の侵攻に対する尚一層の鼓舞だと思いました。その後は混乱の中、38 度線南方へ脱出できずに抑留されました。興南港より「ダモイ東京」と言われて船とシベリア鉄道で移動し、カザフスタンで約 2 年間の抑留生活を送りました。私がいた収容所は約 500 名がおり、抑留中の苦難は勿論ありましたが、死亡者は見たことがありませんでした。

昭和 22 年 7 月に約 41 ㎏で舞鶴港にて復員し、その後は外国人登録をして横浜に在住し、満 98 歳を迎えることができました。誠にありがたいことです。

私の祖国である台湾は戦後、政情が悪化し白色テロ・長期の戒厳令下で多くの青年達が重大な苦難を受けました。私はソ連抑留のお陰で台湾に帰郷することができなかったために、難を逃れたのです。

「私の人生の最大なる幸運はソ連抑留である」と常に公言しています。ソ連抑留の素は内地東京への留学、特別幹部候補生への志願入隊等であり、神様の差配の賜物と感謝合掌している幸せな人生です。

残留孤児だった私

赤崎雅仁（あかさき・まさひと）さん

1936（昭和11）年9月 29 日、満州・琿春で生まれる
民間人
戦地　満州・琿春、延吉、図們（ともん）、長春
敗戦後、八路軍の被服廠に母が留用され、そこで亡くなる
1953（昭和28）年、弟と 2 人で帰国

私は、ソ連と満州国境に接し、北朝鮮はお隣の琿春（こんしゅん）に、昭和11年9月生まれた。国境の町として関東軍駐屯地、陸軍病院等があった。

小3の時、父が38歳で応召され、母と兄弟4人で暮らしていたが、ソ連軍の侵攻で100キロ位離れた延吉（間島）へ。列車で身軽で遠足気分だった。日本人小学校に収容され、終戦を知ったのは知人宅だった。敗戦と同時に朝鮮人たちの略奪が始まり、敗戦の惨めさを知る。

食糧事情が悪くなり、琿春に帰れと命じられた。険しい山道を、私は妹を背中に、手荷物を持って歩いた。現地人の襲来を避けて野宿、夜行。食料もなく畑から食料を盗んで飢えをしのいだ。途中捕虜になった日本兵と行き違った。「僕たちはいち早く日本に帰れる」と言い、哀れな子ども達に乾パンなど投げてくれた。彼らがソ連に連行されたのは、後になって知った。母がその中に父がいないか探して回る姿が思い出される。

7日歩き、やっと琿春のホテルに収容された。畳3畳に5人。母は妹を出産したが（妹は）3日ほどで死んだ。乳も出ずミルクもない当然の死であった。その後ホテルも追い出され、中国人のお寺で最初の冬を迎えた。伝染病が蔓延、私も赤痢に。薬もなく消し炭を飲んだ。妹2人が次々と亡くなった。寒さと飢えと栄養失調だった。遠く離れた土地に掘られた穴に埋められた。

翌年2月にソ連と入れ替わって八路軍が来た。八路軍が難民所に来て、軍服を作る工場でミシンを踏める人はいないか、子ども達も面倒見るからと言う。20組位だろうか、応募したが、8月頃になって引揚げが始まるが帰れず、強制留用になった。みんな泣いていた。

そのうち八路軍と共に図們（ともん）に移動。日本人は皆無だった。学校もなく、煙草工場の地下にある暖房焚き。私は工場長に可愛がられ、郵便局などへ行く仕事。みんな平等、八路軍と同じ食堂で、白米はなく高粱（こうりゃん）だった。1950年朝鮮戦争が始まり、八路軍と共に長春の煙草工場に移動。2千人近くの従業員がいた。総務課に配属され毎日公用信を政府機関に届ける仕事だった。51年、戦後の無理がたたり、母が結核で、望郷を思い42歳で旅立つ。弟と2人きり孤児となった。

53年3月、舞鶴から父の故郷に叔父を頼って帰国すると、父の公報が届けられていた。「北鮮の収容所で病死」。

戦争は絶対にあってはならないし、加害者になっていたことも忘れてはならない。戦後8年中国で生活。喜びも悲しみもありました。

付録　母が残した一通の手紙「雅仁さんへ」

「雅仁さん、小さい時からまじめに働いて行きたがった学校にもやれず本当に苦労をかけて済まなかったね。働き始めてから5年も経つね。雅仁さん達の成長を楽しみに生きてきましたが病気に勝つことが出来ません。」

母の死後、遺書と思われる手紙が出てきたのです。

「雅仁さん不幸ばかり続くことはないでしょう。もし内地に帰れることがあったなら山口でも鹿児島でも好きなところに帰りなさい。
もし母さんの知り合いがいたらばどんなに内地を恋しがって死んだかお話してね。母さんが死んだからと言ってくよくよしてはいけないよ。大ちゃんと助け合って内地に帰る日までどんなに苦しいことが、あっても負けてはなりません。最後に二人の健康を祈ってこれで安心して死ねます。母より」

※この母の手紙は復員時持ち帰れませんでしたが、帰国後に年の差 4 歳遅れで中学に入学した私が、中学2年生の時書いた作文からの抜粋です。

僕は音楽家になりたかった

眞野和雄(まの・かずお)さん

1931(昭和6)年2月15日生まれ
民間人　金城中学校(神田錦町)
居住地　東京都本所区(現墨田区)、仙台市に疎開

東京が初めて空襲を受けた昭和17年4月18日、本所の横網2丁目の家にいた。急に近所が騒がしくなって「変な飛行機が飛んでいるぞ」と誰かが叫んだ。これは絶対に見てやろうと、隣の材木置場の大屋根に弟や友人らとよじ登って見上げると、北の空にキラキラと光る派手な色の飛行機が見えた。荒川区尾久町を空襲したB25だった。

翌年、錦城中学(現・錦城学園高等学校)に進学。授業はやるがしょっちゅう警戒警報が出て帰宅になった。あの頃は皆軍国少年だったが、私は音楽家になりたかった。戦争に行くのは嫌だった。米英の音楽は禁止されたが、ドイツやイタリアの音楽ならラジオで聞けた。セレナーデやマーチ。宝塚歌劇団の「すみれの花咲く頃」の歌も人気で姉がよく歌っていた。

昭和20年3月10日未明、空襲警報が出て家の前の防空壕に逃げ込むとすぐに焼夷弾が落ちてきた。炎が迫り、布団や毛布を頭に被って逃げた。同愛病院に入ろうとしたら断られ、すぐ側の保善学校(現・安田学園)の2階に入って助かった。私達は川の方に逃げて助かったが、同級生は随分死んだ。

朝、校庭に出たら至る所に糞便。乾パンをもらった。皆手前で生きるしかない。リヤカーに物を積んで、親父の会社がある日本橋を目指した。両国橋を越して左に曲がると、浜町河岸に筵を掛けられた死体がずっと並んでいた。明治座に逃げ煙に巻かれた人達の死体はあまり黒くなく、軍のトラックに積まれていった。

仙台に疎開したが、7月10日にまた空襲に遭った。うちは東京で経験していたから、近所の防空壕にいた人を「これじゃ死んじゃう、逃げよう」って連れ出して、焼夷弾が降る中を山の中腹を掘った防空壕に逃げた。焼夷弾が降るときはゴーッという電車のような音がして、止んだと思ったらシュルシュルと高い音がして落ちてくる。音がする度に側溝に伏せた。おっかないなんてもんじゃない。

それでも日本は勝つと思っていた。焼け出されても、頑張れば最後に神風が吹くんだと。けれども原爆のニュースを知って、これは負けるかもしれないと初めて思った。8月15日、灯火管制が無くなって、もうB29が来ないことが嬉しかった。

大学2年の頃、ジャズに目覚め、進駐軍のダンスホールでピアノ演奏の仕事を始めた。進駐軍が撤退した後は、六本木や青山、銀座のナイトクラブで演奏した。石油ショックでサラリーマンに転身したが、今でも大好きなジャズピアノとハーモニカバンドを続けている。